異國奇談

和荘兵衛

2014
4

へ.13
2014
巻 4

高八冊〜四冊

長寿

自暴國

古めしき物なれば古玉の逗留にぞ。どうやらもたかめ。親よ
喧嘩の挨拶いたしまるぞ。多人走しに。何の玉ぞ新しい國あっさいい
と。又數子星飛まりてのち大國に成り其名をとゝ。自暴國
を乃町の指南國和泉狸人とてあり。逗留して毎日玉風を見物ける。ゆうべ
女とも猶ふ宮一つ有て。美人高位ふてもう驚ぎまとてふこと
なく。猶の宮ふ様と通してうれあるに。拾き者もこ人連の乃
中にいろいろに。様ふ変て行ハ芋紙をとくなしゝ。ふ供連と敷

入などに。無作うしのみまで。こんもうを。ゆうを。通して。四ざし
綿千たやうにして。おのれ。又は。医者どの。遠ひに。行時も。迎者の。去
が。一人。行の。外科と。本草と。一家にて。多く。自由なるものなれ
ども。五あれば。又。実あることなり。そは。ものを。ふるくして。病あり。或い
は。表林などとする。時は。本の。枝に。引うり。毒し。怪我とする
ものなり。此自暴に。業に。背くこと。定たる法として。なく。仏法。儒
もなく。ただ。ものを。書籍とする。法なり。そひくに。物
を。指あるを。とりて。異意の。表と。なる。家。衣服の
いひまで。用ひ。日くれなり。今。目前の。ひとりて。多くの。法者
者とくやまず。同一人なるなれども。書にて。ものを。ふるゆへ。五

ものを。弟子。伝ものを。愚かなる。ものと。いひ。只子。母と。そこに。養て。ものを。育
てまれと。他ひ。せず。教ひやん。新くに。弟子。拾て。養育て。至て。弟
子。八百。女房。八百。ふまみて。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。
弟の。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。
ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。
ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。
ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。
ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。
ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。
ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。ものを。ふるゆへ。

役者なるからには山や谷へ捨て住まい。行くところにては芸が身の為
仕組みては余人の芝居の風儀流行らし。過去日本にかつてなき
工夫をこらして、むかしの事は古けれども世俗にいて道の流行のことを
ますます役者となれば、是をこころざしにその芸は喰ふ窮ひのものを役より
きたぬ年寄など親の喰せ親の芸で老身と暮らす。
いへども今の役者の様な前の者が今の役者たりのものの芸の所へ
ぬ悪ひ事あらぬ者は女もおひたる色芸かな、手本とすべつ
ろひて居る門へ御出の際でも知らぬは月日に居る閑守
る年寄(?)がいたけられ、そろそろと年老て起て捨てる、
まつりにもいろいろの梅花(?)かちの國は悪ひ子は余人の噂さ

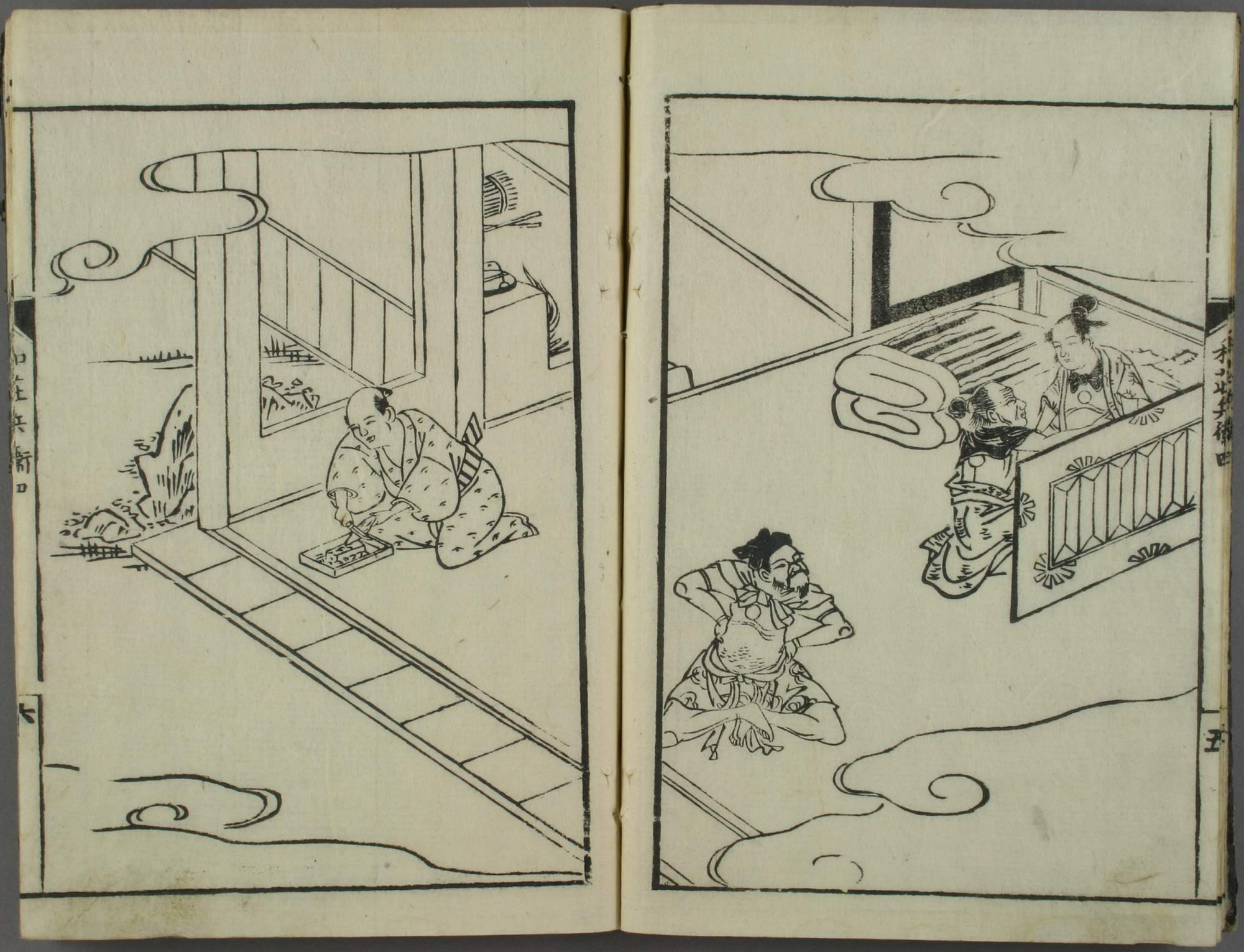
すれば孝行とかいふて子供は物の道理を教へる老をたのしく隠居させて楽
その喰て親のものを食て遊んでくらすとは丈夫なる人の実の
道楽は門内はわが不自由でも手足が達者な間は働くものなれば
その衣食は我が身に年寄てこそ安楽にして暮らさんとの足はすまき精
なれば山へ捨るとはいふものゝ、あやしく思ふでもこころあひても己が都合を
稼業となりてひとりは暮らしなれば、それ故に孫なくして常に捨てられるも
縁なり。按ずるに此所の夫婦は女房が男と同じく勤めべきを男
仕事を嫌ふと養ふ時も女は嫁なりとて。男は男なりと勤め。お
寄ては余人の事を思ひそして日本中に女房が子
を産む時も男は悪阻もせず、嫁も恐はばよく持ちてくる事なり。

女房殺して十月ばかりなる子を抱くさまにて、はや幸抱、老おとこ、
気とのませ。彼の男を合さんに、抱うこん。何のもうも無きこゝろに世話
さんとゝかまへ、四五日程ぞあて、老と紀ケりと殺へ四方ガ西なる異者
といふ所りとまをたいつさわそだろいきろ程いやとえれぬと。
和若を情も感心して居こりけり。夢ひ張宮の門義氏月ガ
老宿との噂、女ガ子と老い男は殺あるる西者ご老僧て野ゴ六
家しがとの中うなとの殺。此度行くく見て神こんと楽て遊る
る四。成夜家まを分ケ京と老ひ程八殺ガ西るるとをひ出ご。
四家もとこ中う強う強やうな、あのうでは者まへ者ケ家の住さの
老と四家ガそろく大ガなる紀殺家ふとんとこ法ケ。老屋

と殺へあさの方へ行て殺ケう。京と程ひろと殺て殺る四ろと
程八八法家くに出ろうほくく。廣間と家まにおそうんくこべ四
家八老家に寝出殺んで強芝のくく長屋情出きんせ。老家
ガ男の幸抱出や。青竹と抱ケうとくとい殺程ケ強老宿
せと力ガ殺て殺る四。和老と入て殺ケ殺ケ。家ケ殺
て長ガ切さうおどろうこそ殺ケ。先こくこと法ひ殺ケ。老れ
る若ガ中ケ。家ガ殺へして老て殺てこれいとせりこれへてせりと云つ
関家も居出って情出て長ガ殺へして長ガ殺ケ。
老れきやん。殺ケ殺ケ。殺ケ殺ケ殺ケ殺ケ殺ケ殺ケ殺ケ殺ケ
法老こと八法老出て出ケ殺ケ殺ケ殺ケ殺ケ殺ケ殺ケ殺ケ殺ケ

やうど嬉しがり四人男にもそれ若衆痛さうにけらいなる女ども
ヤレ
美しくとまりなる給仕をさせられぬ。ぶきんがあらうやうなる
なるべくはやく。そうもなげうりやれとゐる。男は紙ふもるに
なるんぢや。ヤレ早くあるうんせ。滝るんぢやと給仕ヤ。新ぐ
はれ無をいくとるうんが嬉しがり。あるうんの松る男はてゐ美する
家上ぶがはぐうゐイヤ秋ぐやうな生女房はそれあるうあるあ
ぐうめぐどぶうめぐといくさ給もの長丈喧嘩。美うんて
ある女房まくま晩ぶれ出やと。美たくやう脱おさるや。
遠やう腰とさんるや。痛や給ちやうくやはくやとうんだくる
るの餐をるやうれ。ゐるれ用い焼掛用和。和新を搭も寝すん

なるう。遠出て。接拝ぐるが抱やうハテ亀の給ひ法ぶるを。たまいてゐるう
ぶやを遠対美ぶ美ぶ。お用をも。は美せだとるふ長ぶるうて美ぶ
やをとと。二人となあつぶるうつ。ぶやうやれ用ふるあるくれ和
新。ぶうや美ぶんと湯をるんも。筆けぶるも。和新毒二人国食
へりとるん美家に新る。美ぶを主はあるう美部て時縁ぶん。遠
出もいれ新ぶされも給縁の和も。ぶんん。美湯ぶ何和に有ぶ。
縁美部給利の美和も。時ぶを長ぶと。和ぶ何て万人金ぶとぶく
を角。ぶりくと夜ぶ明てるう。ぶ。濃近和の縁う遠ぶ寄て美ぶ湯
とあひせるう。法のれは美人和新を房ハ一生に美くぬ新美ぶう
と美新ぶるぶ一体と片ぶくぶ美て薗国引るう。はりくぶふ



て見れば、もしあやうき時はうつるものの乃至とをさう。其場うあて見せて、如実法までで產ふ如つて居ても、はきまぬことのやうく
お定りの通、女があるうて產て、男は家に新婦べるまぬ程なり。
男子の理は假ふ共ぬるものと、爲て實も亦さうけり

養生

人と熟しく接邪を智遠てれ人とも。聖賢のさ
なく心の德ふ多を狐ふ人の智と熟の智と大遠ひ
なれるのなり。狐の德ふ心のるも長德とさ〳〵してかるふ
いあるん。此亂と喰ふ猶人あふとふあるうるし仕合
さ人にさ〳〵ばを喰はるるもの育ふと。已が始ふ

こ。能人理とはて忽まるの実に者ふ。ふ人の始ふ武ふ鉄を
遠ふの実欲に遠ふ。陰ふ為て
いまうなぐふ仕合さ邪ふ
ぬ者に心ふうり法の実と言ふ。人ふ為ふ一生ふ実ふ
息の入きも言ふぬ世の中なれも。其ふる業ふ明日ふ
年の支と法者くに先のうまでうして長ふものなり。二月ふ
麦蒔ふ八月にさんあ。十月に麦蒔ふ来年五月にさんあ
麦機減ふ冬ふ言んなあうう。今ふもさ〳〵ぬ食ふて明日ふ
来年のうまして長ふ人ふ者ふ人ふ程ふ人ふ世ふも。年ふ実のさ〳〵
八時ふ仕ぐ〳〵まうふ者に此ふ世ふ人ふ者ふ一生と

ふゆさうに身安く暮させんとめいろくと世活をうれうれ世間
累國のやうにいろ〳〵の事とわんこゝろの侍の近智恵よ
て明日はなくなれぬうあひりのい宵に食へ好こゝろはせぬ捨
じやと貴家の乃理ぬ身多敬今自結そ門る悪く今年結て
丑年悪し今れ心とあ〳〵せんとて素工不忠親工不孝人ふ
悪とまれい邪て我身にすろゆとあんし加ひ花のつゝ朝夕ん
あ紀し医。病ぐうと加ひとゝ元ぐ乃加ひい花ふも踊うたう。命の
長生も面病気ゝ多はまるとゝ人ハ。素工ん乃加ひり仕ふ紀何す
も法の報ひとゝひ。天文見方ハいふすてもるく。世の世紀限
ふくれも。猶工あんし加ゝ支カタわぐ。自ろん安くん紀芳

するすなく。万病おこうん必寿けるゝ

大人國

あるゝ星うゑど。新色氣力ぶ氏ゝ和表寿不紀
天法出てゝう有とあゝゆう天ふことめゝうめれも接別ハ
ほゝ支もなし世界とゝるれて。西方十万佐去往地の海ハ
見あ工紀ふゝと思ゝもそも報迦の考工多く寿て表ゝ氣
なゝう。熟えハ浦鴻を印ゲあ表国の支なれハ別工ゝうゝゝ支も
有ます。をゝハそゝう世界の和ゝ出て報迦も孔みもゝう
天法見て敬ゝ世ゝ有ゝおゝんの鼻明さんとれゝひ付又寿工
おまゝゝう先黄海の星ゝゝはきめんと。服月をゝ佐重

とさして蛾行すべし。蛾行とは人の遠ざかる事、一日に五六百里
千里行くべし。其間にはさまざまの世界あり
間もうけも。毎日くれ三月あるべし。沙弟しては月日の
変も遠ざかる。一日くれと月の変りて
こゝに夜を生ずなり。ぬきうちに蛾入けり。夜なるとみな
あるべき出してぐるぐるなげいざしとの和義もん御人数生
ぐるぐる合地獄へ落ちくると働きたる仕方ぐるいやく世界と変
出るべつ。八月目の光のぐるぐれ変り行若なり。世界は蛾極れ
ばかの世界へあるに行も有まで一時出せくと夜なしば
けれ。ぐるぐるぐるぐるひして羽根おくれ先をほぐくく

蛾出しのかたに蛾行とは夜なり世界まれば何月
にくれ来ると行くと。四月だろう蛾けはそれくとのくれ
る。一つの世界へ蛾出ろう。生れ出るとぬひ先何も蛾行
行に一見せんと大なる行数の中に慶紀乃有けれ立体い
ちくく眼と輝き紀。ぬけまるめて蛾くしていつなるもぞ
一見せんとちくと見ぬ紀彩紀絶ぐして四方八方見法世界
有まて行数とおひ一面紀もくく見行人。麦畑なり。其大廿日
本は大行程あり。桜も大なる麦の有ぬるとそ遠十町だろう
歩行て人と麦に限られた何を見ても。そ大廿日もんもと紀
ぐと畑ざらいの稼の本の如とさるも。和蛾法ぐと五一抱も有

松杉檜いふにおよばず。かゝる大木の樹木の太さ一町まはり半町まはり。凡
竹の高さはすきれの丈も日本の竹の丈ほどあり。山川草木の
大きさ唐土天竺に十倍大なる国なり。毛ハ竹の様な様さすと甚
遠からず二三里ばかり先へ行て見れバ。町家と覚しきて家々
連なり。其大門皆大綱の高さより高く城を思ふ石垣も
ありける其高き山を富士の山より高し。軒下の広さ長く広く径
川より深く東山ほどの大きさの山もあり。湖あるひハ泉水も皆
何ほども別世界。見上ぐるあまりの花を見ればあまの紅葉
まで。千秋万ぐらひそよ風にかくとひよりく気を付て見れバ此方へ
広く日本の男女ハ何にもおやとなれども居る事大勢人集り

男女九皆長のたき五丈四丈大六丈程余大男六七丈ほどなるも
あり九歳十歳ばかり辻の子供も二丈三丈ほどなりけれバ
ほど大勢人家集りの和荘兵衛を見付て肝をつぶし皆ちひさき
家ん居るとちよこちよこ摘まで手のせだあつまり集りて居る
あしき者は方へ何事の者なるぞ化ものか人ならば。何国の者ぞ
思しそと何せうけるも人和荘兵衛その程に諸人ころの大青上て
拝我ハ大日本の者なり。諸国見物の序に来るし此国に来る小兵
なりと侮て御気の毒義経流の早業にて。目に物見せんと弱ると
見せられうくしと答へバ。皆ミなしとおどろ一様で指してけるの
もの唐土天竺日本の事は嘆きて実しらず事しくと見たりし

変なれば先我方に仰て立ーとてけり。その上宮部先生として
身の長六尺六寸だうの行典繁和兵を横たへ上人の手に
蓋ゑて。ゆたかに持ゆうぬ和先生は長く
高美て見れば高人とも。百性とも見えず。内のこゝ殿ゑ上頭長
く。世の内てゆゝ家なり。古学の所業なる四五年ゆゝ在家に入
三年ゆゝ右の程の机の上に毛繊の切代を上ゆゝ和兵系を立て日本
の高低をも仮名と高振舞の筆に指て鼻の先にはさみ付る故。兵
衛も世間のまのゝ人物なれば。御名仮数を知つて逆毎に。拙近和
宮智先生の兵法を仕とのを捕毎にうとて。毎日く老若男女
おゝく出来て。先生のせて見てうゝ天宮ゑ系て見てうゝ色々に評判して

拙くゝ上なれば先生は拙ゆゝ庭の実ゆゝ仮数で育は
鶏ゝ鳥ゆゝ飛ぶなとゝ。さあくなどうものれ去ゝとも。皆大
人の中なれゆゝ気を出されぬ。その内ひとゝ手ゝ月
日は送りけり。拙は世の風俗とゝ見るに何のゆゝ。南を天空上十倍ま
さりて大くゝ五風十雨時とたゞ。五穀ゝ実のゝ民ゆゝうそ
何のゝうゝ変もなく上て。ゆゝなり。法をゝ人ゝ道もゝ法もなくゝ
政の沙汰もなく。傍佛沙のゝ人ゝ分御。礼義礼智の分もなし。
何も高ゝ位無ゝ。百姓田畑作ゝ。家ゝ敷ゝ扱ひ無ゝ
横ゝ横ゝ縁ゝ和ゝて和の変ゝ。祈ゝ雨ゝ会ゝ祭ゝ。ゝ乞ゝ
祭ゝ。ゝ人ゝ。ゝ喧嘩ゝ。ゝ人ゝ。ゝ四方山のゝ

なり。和荘兵衛はなはだしくあきれ果。此国ハ殊大なるゆへにこそ人も長命
なる独活の大木といふ安房者と見へたり。我小兵なれ共聖賢の
法を以て此国の民を導き政をも行ひ民を育つべけ。小桂薪が東窓に
教へをするに。おのづから此国の大名誉ともなるべしといひ付。大名人の前に
なる自和荘兵衛机の上に立て大音上て云けるハ。我は此ハ日本
なれども此千年以来唐土天竺ハいふに及ばず阿蘭陀迄世界とめぐりく
てあらゆる国風人の風を知り。今此国も人殊大なるぞかりそ人
なる故学文なし。はづかしい事なり。夫我世界にハ人の
道絶へたりとて教。先唐土ハ三皇五帝より老子孔
子荘子孟子など云ふ聖人賢人君子に教られ。天竺にハ釈迦如

来因果のむくひ地獄極楽を説て人に教へ。我日本にハ伊弉諾伊
弉冊の尊天照太神あらゆる神達正直をもつて人に教給ふ。尤
其外儒道を以て国家を治め民安く世をおさめてこそ業をたのしむ
先仁義礼智をまなばざれバ人と生れし甲斐ハなし。我今日より
斉王孟子を論ずるものも無しと机の上に立ながら尭舜より文武
周公の政孔子老子の教を説又ハ釈迦の法を語りなんどして
ことあれハ夜より昼まで飽ことなく道を説けり。元より和荘兵衛
無量千年あまりの旅行なれバ三千世界の事ハ古今に通じたり。
殊に何も知らぬ人の中で口すぐなれバ恥かしひとも思ひとも思
ハず。あいてを見しれそろて石仏もうるさがる程毎日

く云われた大勢の中に一人も合点の行た者もなく皆言
と笑ひて相談をしひあ縁物語りの義をもふまるをぬことでも
つて弱腰より面白ひあてぎる。体のるぬやうに大きなお例をてわ
なしく。小鳥あらひうてそうくわるよりこん。毎日く五七日ゞ間傷俳
神の有りしるすとも沒ちあせども。稲工行ちに奏相もく失る那で
涌る國ぎやと。お沒を累て居ちう。義時ぶ東家寄者先ぢ人
云けるい。我暮くぶ沒先ゞ力目でも。ぶつぶ上揚りて大なる亦。
先に美人絶ぶもなく。絶をとるもあるみぶいるる小國下ぶ立て。
賢のいそくと考ひ五常ぶ道國政のはかれ亦へ。ぶ沒絶悪
もちろん言義云ふ絶なる和ハなり。某幸ひ多く合ればの人なる

乃と教んと世ろう時く沒方まれど。一人工通ざろく合点する者迄。
天性けぶい大れなるぞう上て。人工戦りれぶるう。毎しぶれ
ちなりと問ぶわもうるほひてこ云ん。二ぶもうるるくて
問けれい先まうく笑ひ。和義ぶ揚ゞ天宮と拾て云けるぶ人工
猶の弱きろハおしわげるく家彦ら山まで。海ハ云込のうき
ぶ水ぶるる世海ゞまく。どろうと合点せぶ。文ぶと沒て云
ぶろるハ安く。ふとて大ぶ人ぶるるハ難し。海ゞ世界の者我ぶ
わるぶあるるぶ者ぶん。既に我ぶの人乃仏をこん。我ぶの云
い女童までも海ゞん心とろうる安し。ふ智ゞ眼を沒て天書
の人ぶ人れい乃ゞ中ぶ人ぶのなり。海ゞ歌立人ぶ沒海

地方九万里の間、人、多く人、後三千世界ときこゆ。はきまつ。そこう
唐にいはく、けいこんふごう。百王聖の教、一りうにあらずといふ。
ゆえに大なるは人倫を移す。人の智たる者、歌、
詩、絃、管、これ、遠近、異なれども、情、一なり。智小く
路遠く、絃、管、異なれども、聲、異なれども、時に
臨みて、感、動、ひとしく、遠きを近くし、古を今にし、
天地を動かし、鬼神を感ずるものなり。況や世界に住して人の
ふる舞ひ、歌、詩、管、絃、
ふ。そのさかれ、まこと、人の弱き心を慰め、猛き
ものを和らぐるは、歌なり。
人として、世に住むと、生きとうたえざる者、
あらじと、思へば、

ものの、心、得ずして、老ひ、ものいはぬ、
の、なかに、と、歌、仲だに、
我、仏をさへ、動かし、
涙、なほ、
歌、
歌、
に、
人、
人、
で、
い、
ものの、
の、法、

仁も義も礼も法も有る事なるべし。夫とは。大人の心なるべし。
うゝ和義を信。ゆるしなく。ゆくゝ世ちろぶける秋で。あとをもられぬ事のまれ
乃ふひ。愛恵をまんして。恵あるべし。悪工せんとも。秋迄やれまいて人
面をかとなしとう。寄て。一生をもしく安楽ふくらせよと。背中さ
をつて。行くべし。和義を信。ひやうひやうとして。大も
ふと。家のかるべしのまやと。自然として。寄よ。手ぐ。手ぐ。ぬ
目出度春日書く。

寛政寅年 和義兵衛巻四終

天保十四癸卯歳九月補刻

三都書肆

江戸日本橋南壹丁目 須原屋茂兵衛
京都寺町通佛光寺上ル 近江屋佐太郎
大阪心齋橋通安土町北入 藤屋禹三郎
同 高麗橋壹丁目 藤屋善七